建築設備の「顔」見せる意義報告

JABMEEシンポ

建築設備技術者協会（JABMEE、野部達夫会長）は15日、東京都千代田区の連合会館で「顔」をテーマにシンポジウム「建築設備の『顔の見える化』に関する検討報告会」を開いた。建築設備技術者が施主や他業種の技術者に「顔」を見せる意義を報告した。

趣旨説明で野部会長は「建築設備にかかわる仕事が無機質化している。設備技術者の仕事は建築の息吹を吹き込むことであり、『顔』を見せることで信頼や責任、仕事の手応えを感じられるのではないか」と「顔の見える化」が果たす役割を語った＝写真。

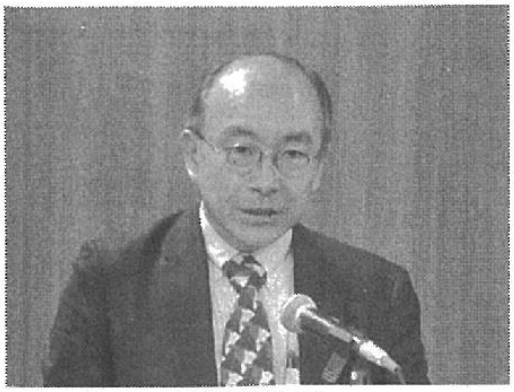
報告会では「顔の見える化」の効果や留意点、建築設備で果たす役割を紹介したほか、野部会長をコーディネーターにパネルディスカッションを実施した。

建築設備「顔の見える化」

裏側の情報発信し手応ある仕事へ

JABMEE

建築設備技術者協会（JABMEE、野部達夫会長）は15日、東京・千代田区の連合会館で、建築設備の「顔の見える化」に関する検討報告会を開催した。一人ひとりの様々な情報を含んだ「顔」を発信することで、バックヤードで建築に息吹を吹き込む建築設備という仕事への手応えを高めるための布石とした。



野部会長

JABMEEは、建築技術教育普及センターの委託を受けて、「建築設備の『顔の見える化』に関する検討」委員会を16年9月に設置。会員企業から推薦した14人の委員で、約半年間検討を重ねた。当日は委員からの報告のほか、会場から意見・質問を募りパネルディカッションも行われた。

報告会の冒頭、野部会長は「個人の表情、考え、深い努力を何か見せることができないかということが委員会のテーマ。個人情報保護の必要性が叫ばれている時代に逆行する含みもあるが、建築設備の仕事が無機質化しているように感じる今、手応えのある仕事にするために顔の見える化は重要」と述べた。

報告では、「顔の見える化」についての好事例を紹介。例えば施工現場の職長であるフロアマスターの顔写真を各階に表示することで、フロアマスターの意識向上や伝達事項の周知徹底につながった。顔を見せるだけでもコミュニケーションのハードルが下がり、さらに情報を紐付ければ安心感や親近感が顔以外の情報と結びつき情報が立体化する効果があるとした。

一方でマイナス面も指摘した。個人情報の漏洩・流出への防御が必要になること、いわゆる肖像権など権利関係はもちろん、定期的な情報更新のルールづくりなどもあげられた。

その上で提案したのは、「建物情報マッピングシステム」として、自分が携わった建物に関して設備の特徴や技術的情報を記録しておくもの。広域に自分の仕事を振り返り達成感を得られるとともに、他者への紹介で顕示欲も満たされる。また業界のクローズドな枠をあえて活用した「建築業界ソーシャルネットワークシステム」も提案。さまざまな情報を共有し、業界の活性化につなげる。

報告後のパネルディスカッションで野部会長は、「今は情報ツールが発達し、仕事の回転が速い。人との接触も合理化され、シンプルになっている。仕事への手応えが薄くなる原因のひとつであり、効率化のマイナス面ではないか」と指摘した。

日刊 建設工業新聞　2017年（平成29年）3月21日（火曜日）　（14）

設備技術者の顔「見える化」

業界活性化へ役割や実績周知

JABMEEが検討報告会

建築設備技術者協会（JABMEE、野部達夫会長）は15日、「建築設備の『顔の見える化』に関する検討報告会」を東京都千代田区の連合会館で開いた。野部会長が委員長を兼務する「建築設備の『顔の見える化』に関する検討委員会」が半年前から議論してきた成果として、個人の顔や実績を含めたさまざまな情報をどのような形で社会に提供するべきかを委員会メンバーが報告した。

冒頭、野部会長はあいさつし、「建築分野で設備技術者は陰の存在だが、設備がなければ建築に機能を吹き込むことはできない。個人情報の開示にはハードルもあるが、委員会で議論した成果を皆さんが活用して建築設備業界の活性化に役立ててほしい」と述べた＝写真。

同委員会は、建築設備技術者の役割やその活動を広く周知し、社会的な地位向上を図る方策として、建築設備技術者の「顔の見える化」を進める効果や問題に関する多角的な考察を行ってきた。報告会では建築設計事務所やゼネコン、設備メーカーに勤務する70人余の設備技術者が集まり、委員会メンバーと議論した。

日本設備工業新聞　2017年（平成29年）3月25日　（5）　第2250号

建築設備「顔の見える化」へ

JABMEE 連合会館で検討報告会開く

一般社団法人建築設備技術者協会（JABMEE・野部達夫会長）は三月十五日、東京・御茶ノ水の連合会館で建築設備の「顔の見える化」に関する検討報告会を開催した。「顔の見える化」の効果や問題点について議論するとともに、個人情報保護の必要性が叫ばれている現代に敢えて個人の顔を見せることで安心感、信頼度、親密度、興味などの利点を生む布石とした。

顔を出すことにより、相手は親密度が上がったような気持ちになり、信頼度と責任感を上げる効果が期待できる。一方で、顔を出すことによってファーストインパクトがより悪い印象を与えるケースもある。報告会では、設計・施工・運用の各フェーズで担当者の顔を見せることをはじめ、SNSによる情報発信や表彰制度の活用等を通じて施主との信頼構築を試みている。

当日の報告会には会員など約三十名が参加。冒頭、総合司会を務める野部会長が趣旨を説明し、㈱大気社の加藤圭氏と三建設備工業㈱の細野淳美氏が「顔の見える化」の既往研究と事例、新菱冷熱工業㈱の牧野眞司氏が「顔の見える化」に関する効果と留意点、同社の鈴木雄司氏と新日本空調㈱の小林健太郎氏、三菱地所㈱の山賀喜芳氏、㈱竹中工務店の坂田実氏が建築設備における「顔の見える化」提案を説明した。

パネルディスカッションでは野部会長をコーディネータに、三機工業㈱の池亀大輔氏、㈱朝日工業社の佐藤隆一氏、高砂熱学工業㈱の鮫島武士氏、清水建設㈱の樋山晃氏、ダイダン㈱の多田光輝氏、アズビル㈱の古谷守氏、㈱三菱地所設計の山本弦氏らをパネリストに迎え活発に議論した。

【写真上は当日の会場の模様】

THE KENSETSU TSUSHIN SHIMBUN
建設通信新聞
Architectures, Constructions & Engineerings News (Daily)
2017年（平成29年）3月22日（水曜日）（第三種郵便物認可）

「顔の見える化」通し働く手応え

JABMEEがシンポ

建築設備技術者協会（JABMEE、野部達夫会長）は15日、東京都千代田区の連合会館で「顔」をテーマにシンポジウム「建築設備の『顔の見える化』に関する検討報告会」を開き、「顔の見える化」検討委員会の活動成果を発表した。建築設備技術者の確保・育成が課題となる中で、建築設備技術者が施主や他業種の技術者に自身の「顔」を見せる意義とは何か。

時流奔流

■設備技術者の手応えのなさ

「建築設備にかかわる仕事が無機質化している」。趣旨説明した野部会長は、シンポジウムの開催意図をこう強調した。建築設備技術者は「建築に息吹を吹き込む」という重要な仕事だが、その内実が社会や一般の利用者に知られる機会は少ない。また情報ツールが発達し、仕事の回転は速くなったが、一方で「いろいろな検討を重ねるケースが減り、ルーティンの仕事が増加した。人との接触もシンプルで深い、かかわりが昔と比べて減少している」という。

仕事の手応えを取り戻す手段に期待するのが「顔」の存在だ。「顔には信頼や安心につながる独特の情報が含まれている」とし、自分自身の表情や努力、考えを示すことが自尊心ややりがいといった体験につながると語った。

野部会長

■「やりがいの見える化」期待

シンポジウムでは、ゼネコン、サブコン、設計事務所などの設備技術者7人が「顔」と「仕事の手応え」をテーマに議論を深めた。

三菱地所設計設備設計二部主幹の山本弦氏は技術者の手応えが減少した原因を技術者を取り巻く「閉塞感」と指摘し、「かつては失敗しながら自分なりのやり方でまとめてきたが、今では決まったやり方で失敗せずにやるしかない」と分析した。「窮屈で大らかさがなくなり、間違いや失敗が決して許されないようになった」という。

設備機器が建築にとって当たり前の技術となったことも設備技術者が手応えを感じられない一因とアズビルのビルシステムカンパニーマーケティング本部長の古谷守氏は語る。問題が起きなければ設備の存在が意識されることはなく、仕事の成果を知る機会も少ない。「建築の内部が快適なのは当然であり、問題が発生しても裏方だけで処理していく。やりがいを感じる機会が減ってしまった」とした上で、技術者の存在を一般社会に発信することが業界の地位向上、やりがいの向上につながるとみる。「顔の見える化がやりがいの見える化になることを期待したい」とも。

仕事の無機質化、閉塞感を打破

やりがい向上へ技術者の存在示す

■業界のアピール不可欠

ただ、個人の顔や思想と仕事を結びつける上では、公開範囲や必要とされる情報の選定などの課題も多い。高砂熱学工業東京本店第二事業所技術一課長の鮫島武士氏は、建設工事の作業者約2500人の名前を記載した銘板を設置した『シャネル銀座ビル』の事例を挙げ、「現時点で可能な顔の見える化の到達点」と指摘した。就職活動で商社、金融、メーカーなど会社の顔である商品が明確な企業に人気が集まる状況を踏まえれば、「まずはわれわれの存在を知ってもらうことが手応えや業界のモチベーションアップにつながるのではないか」と語った。

シンポジウム後、野部会長は従来の設備技術者を「20世紀型分業制時代の部分最適化した技術者」と語り、建設産業が成熟産業となった現在は「単に配管やダクトをつなぐだけでなく、建築の利用者に直接貢献する仕事をしているという強い意識で自分たちの存在を示さなければ働く手応えや業界の活性化は得られない」とした。